

志 一同志社の座標軸—

講演	望月 修治【もちづき・しゅうじ】
講師紹介	日本キリスト教団同志社教会牧師 同志社大学神学部嘱託講師

1. はじめに

1－1. 「なお壮図を抱いて」

新島襄の語った言葉は印象深く同志社人の中に刻まれています。「人一人八大切ナリ」「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ望テ止マサルナリ」「真理は寒梅のごとし」「自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳」それからNHKの歴史秘話ヒストリアや大河ドラマ「八重の桜」で知られることになった「生き方がハンサムだ」という言葉、挙げたらまだまだ出てきます。新島言葉の中に「なお壮図を抱いて」という言葉があります。ややマイナーかもしれませんが。しかし私はこの言葉に興味を惹かれます。

1890年の正月に新島が作詩した漢詩の中に歌われている言葉です。

「歳を送りて悲しむを休（や）めよ病羸（るい）の身、鶏鳴はやすでに佳辰を報ず。劣才縦（たと）え済民の策に乏しくとも、なお壮図を抱いて此春を迎う。」（『同志社百年史』通史編一 359頁）。

「佳辰」とはここでは正月のことです。1890年の正月を、病（やまい）重かった新島は神奈川大磯の百足屋（むかでや）旅館で迎えます。そして1月23日、妻八重の差し出す腕の中で新島は息を引き取りました。1843年2月12日が誕生日でしたから、46歳11カ月の生涯でした。前年1889年10月、新島は病気の身をおして大学設立募金運動のために関東に出張します。しかし、11月末に群馬県前橋で発病し、大磯で療養生活を送っていました。病は重くなっていきました。そして迎えた新年元旦にこの漢詩を作るのです。

「歳を送りて悲しむを休（や）めよ病羸（るい）の身」（病に倒れてしまつて病気的身で1年のおわりを迎えたことを嘆くことはすまい。）

「鶏鳴はやすでに佳辰を報ず」（もう朝早くに鶏が鳴いて、正月の訪れを知らせてくれている。）

「劣才縦（たと）え済民の策に乏しくとも、なお壮図を抱いて此春を迎う。」（たとえ才能に劣り、苦しんでいる人々を救う手だてに乏しくとも、なお大きな志を抱いて、この春を迎える。）

この詩にわたしは魅かれます。病重く、病床から身を起こすことも辛かったであろう状態の中で「なお壮図を抱く」と歌う新島の志の強さに魅かれます。いやもっと正確に言えば、新島にそのように語らせる力、新島を支えていたものに魅かれるのです。人にそのような強い志を抱かせる働きあるいは力と言っていいかもかもしれません。

1－2. 「会衆派ワールド」へ

1843年に安中藩の江戸藩邸で生まれた新島が、日本を脱国してアメリカのボストンで会衆派のキリスト教と出会い、明治維新後に帰国し、京都でキリスト教主義の同志社英学校、同志社女学校を設立するにいたる歩みは、冒険に満ちています。「人生はアドベンチャー」です。真理を学ぶと共に、その真理を生かし用いる心を、聖書に基づいた生き方を伝え教えることで育てる、そのための教育の場を日本につくる。その志を抱き、生きぬく人生を新島に歩ませたのは、第一義的にはキリスト教の信仰です。それはボストンで出会った会衆派の教会の人たち、その人たちとの出会いを通して新島が味わい知った聖書の世界、そこに語られている神と生き生きと出会ったことにあります。同志社の今出川キャンパスは、道を挟んで南には京都御苑、そして北隣は相国寺です。相国寺は金閣寺、銀閣寺をもつ京都仏教界の一大勢力です。明治初期、そのような場所にキリスト教の学校を建てるなどというのは本来無謀です。多くの反対運動が渦巻く中で、しかし撤退せずに志を貫く、そのような生き方を新島に貫かせたのは、アメリカのニューイングランドに根付いていた「会衆派」と呼ばれるキリスト教の信仰であり、その信仰に生きる人々との出会いでした。元同志社大学神学部教授の本井康博先生は、新島が強く感化を受けたこの世界を「会衆派ワールド」と呼んでおられます。

幕末に日本を脱国した新島がニューイングランドで送った8年間の留学生活に至る道は、文字通り奇跡と呼ぶべき出会いによって切り開かれていきました。そこでの節目節目の出会いや出来事の一つでも欠けていれば、ニューイングランド・ボストンでの留学生活と会衆派のキリスト教信仰に出会うことはなかったと言っても過言ではありません。それはリベラルアーツの同志社もなかったということです。

2. 新島の「志」のルーツ

そこで、新島襄が歩んだ道を大掴みですが、辿り直し、新島の志のルーツを掘り起こしてみることにします。

新島の志は1864年21歳の時から始まります。

2－1. 江戸・安中藩邸

新島は江戸の安中藩邸で生まれ育ちました。仕えていた安中藩主が交代し、新しい藩主は新島を「奴隸」のようにこき使ったといいます。それゆえに当時の封建社会を「暗黒世界」、安中藩の狭い藩邸を「閉じ込められた閉鎖的世界」と捉え、そこからいかに脱出するか、そのことに頭を巡らしていました。安中藩江戸藩邸は四千坪ほどの広さの正方形の土地でしたから、そこから見える天は「小さな四角形であった」と新島は回顧しています。

2－2. 上海へ

19歳の時に新島は生まれてはじめて江戸を離れて、備前松山藩の快風丸という船で瀬戸内海の玉島（今の倉敷）まで航海するチャンスに恵まれます。解放感を味わい、空は本当に広く丸い、そのことを実感した新島は自由に憧れる気持ちを止めることはできませんでした。1884年、再び快風丸で函館へ航海する機会に巡り合います。千載一遇のチャンスでした。新島は、安中藩という封建社会からの解放を求めて、函館から脱国、密出国します。21歳の時でした。脱国した新島はアメリカへ渡ることを願っていました。アメリカには自由があると漠然とではありますが思っていたからです。しかし、函館から密出国した段階で、その保証は何もありません。行く先を知らないままの旅立ちです。

上海をへてアメリカに向かうのですが、そのとき乗船できたワイルド・ローバー号という船が、たまたまボストンのハーディー商会が保有する船でした。船長はH・S・テイラーです。これがヨーロッパ船籍の船であつたら、新島の行き着きつく先はアメリカではあり得なかつたはずです。当時の上海に停泊する船の大半がイギリス船でしたから、行く先はイギリスであつたかしてうまくいかなかつた苦い経験があつたからです。それにも関わらず、ハーディーは新島の身元を引き受けたのです。それもハーディー夫妻には四人の息子がいたのに、養子として新島を家庭に迎え入れたのです。破格の待遇です。その理由は大きく3つあります。

2－3. ニューイングランド・ボストンへ

ボストンに到着し、船主のハーディー夫妻のもとで8年間にわたる留学生活を送ることになりました。ボストンは数多いプロテスタント教派の中でも、もっとも自由な教義と雰囲気をもつた会衆派の拠点であり、しかもハーディーはボストン有数の会衆派教会の有力な会員であり、役員でした。ただしボストンに到着後、上陸を許可されるまで3カ月を要しました。身元引受人が必要だったからです。テイラーは船主のハーディーに新島の身元引き受けを頼みます。しかし当初、ハーディーは断るつもりでした。というのは、ハーディーは中国青年の世話をしようとしてうまくいかなかつた苦い経験があつたからです。それにも関わらず、ハーディーは新島の身元を引き受けたのです。それもハーディー夫妻には四人の息子がいたのに、養子として新島を家庭に迎え入れたのです。破格の待遇です。その理由は大きく3つあります。

①新島がハーディーに提出した英語の作文「なぜ私は日本を脱出したか」（Why I departed from Japan）

ハーディー夫妻はこの作文を読んで新島の志に心を打たれます。

②テイラー船長の推薦

ワイルド・ローバー号で上海から7カ月の航海をしてボストンにきました。その間、同じ船の中で過ごすわけですから、新島の人となりをテイラーは肌で感じ、新島もまた船の生活の中で変わっていったはずです。その新島の姿をテイラーは見えていました。7カ月間の共同生活で新島の人物と願いを肌で知っている船長からの推薦ですから、言葉に真実が宿ります。加えてハーディーとテイラーは故郷が同じでした。チャタムです。ニューイングランド（マサチューセッツ州）の漁港です。二人の父親はチャタムでいずれも船長をしていて、互いに親しかつたのです。ですからハーディーとテイラーは単なる船主と船長という関係ではなく、同郷のよしみであつたのです。

③ハーディとの面接

新島の「脱国の書」を読んで心動かされていたハーディーは、直接新島に会って、日本脱国の理由を懇問に語る姿に接して、確信を深めたのでしょう。

ドラマであれば出来過ぎのストーリーだと言われかねないような話なのですが、しかしこれは事実です。事実であり奇跡です。こうしてアメリカでの8年に渡る新島の留学生活は始まりました。

このボストンの風土の中で、新島はリベラルな待遇と教育を受け、また会衆派の教会で礼拝を守り洗礼を受けました。ボストンはリベラリスト新島の誕生の地となりました。全く新しい人の誕生といっても過言ではないと思います。新島はアメリカで「人間を発見し、日常生活を発見し、もっと具体的にクリスチャン・ホームを発見し、教会を発見し、学校を発見し、市民を発見し、市民社会を発見し、政治参加する国民を発見した」と評されます。日本を脱国し、16カ月後から始まったアメリカでの8年間の生活、それは価値観が180度転換する発見、出会い、学びに満ちた日々であり、時間でした。そして信仰を与えてくれた日々でした。

3. 会衆派 (Congregationalism)

新島が抱いた志について語るとすれば、会衆派と呼ばれるプロテスタントのキリスト教派を抜きにすることはできません。ボストン周辺は全米で会衆派が最初に定着した地であり、最も支配的な地域でした。その結果、ニューイングランドは、フィラデルフィアと並んで、アメリカ市民社会における「自由の発祥地」とも言われます。この「会衆派ワールド」で新島が与えられたものは語り尽くせないほどの広さと深さをもっています。

3-1. 会衆派の歴史的起源

会衆派の歴史的起源は英国の宗教改革にあります。しかしさらにその源流は16世紀の宗教改革に遡ります。

3-1-1. ドイツ／ルターの宗教改革

1517年、ドイツのマルティン・ルターによる宗教改革が行われました。当時、ローマ・カトリックが贖宥状（免罪符）を発行し、総本山サン・ピエトロ大聖堂の資金源にしていた。「献金箱にチャリンと音がしたとたんにあなたの魂は煉獄（天国に行く前に償いの責め苦を受ける場所）から救われる」と言いながら贖宥状が売られていたといえます。ルターは贖宥状について、人間の力で罪の許しが得られるかのような考えを間違えたとし、イエス・キリストによる神の恵みによってのみ救われると説きました。「信仰のみ」「聖書のみ」が宗教改革の精神です。

そこで生まれてきたプロテスタント・キリスト教会は「ルーテル教会」と呼ばれるようになります。しかし、ローマ教皇庁に対して改革を断行するにはドイツの諸侯たちを後ろ盾にすることが必要でした。ルーテル教会はドイツから北欧に広がりましたが、いずれも諸侯たちに庇護を受ける領邦教会ないしは国教会でした。教会と国家との係わりという点では中世のカトリック教会と何も変わらなかったのです。

3-1-2. スイスの宗教改革

宗教改革はスイスでも行われました。

チューリッヒにおけるツヴィングリによる宗教改革により「改革派教会」が誕生。

ジュネーブにおけるカルヴァンによる宗教改革により「長老派教会」（プレスビテリアン）が誕生。

両者ともチューリッヒ、ジュネーブの議会を後ろ盾として、その権限によって遂行されました。宗教が政治権力を借りて改革を遂行したのです。

3-1-3. 英国の宗教改革

会衆派教会の歴史的起源である英国の宗教改革は王室の婚姻問題に端を発します。

16世紀、熱心なカトリックであったヘンリー8世が男子の世継ぎを望んだため、次々と妃を変えたことで、離婚を認めないカトリックから、離婚に関して寛容なプロテスタントへ乗り換えました。その後治世者が交代する度に、プロテスタントからカトリックへ、次はまたプロテスタントへと宗教が変わり、その転換ごとにカトリック側、プロテスタント側の多くの教職者や信徒たちが迫害され犠牲になったのです。その対立を解消するため、そのどちらでもない「英国国教会」（聖公会）が設立されました。

イギリスの宗教改革は、宗教的動機というより、政治的動機に起因するものでした。

3-1-4. 会衆主義の起こり

英国国教会の改革が不十分だとして、より徹底した改革を求めるピューリタン（清教徒）運動が起こりました。

当初は英国国教会そのものを否定したのではなく、カルヴァンの福音理解とその改革の方法によって、英国国教会内部からの教会改革を訴えるものでした。しかし英国国教会はもちろん、長老主義ピューリタンにおいても国家と教会の結びつきについて曖昧さが残ったままでした。

国王が英国国教会の首長でもあるため、教会は国王の権威の下に置かれました。またカトリック教会と同様、教職と信徒を質的に区別したことにより、「万人祭司制」が否定されたため、それらのことを問題とする人々が現れました。彼らは、教会は国家の強制から自由であり、キリスト者は神の前に平等であると主張し、英国国教会から分離・独立します。自分たち独自の礼拝と教会形成を目指すキリスト者が、このピューリタン運動の中から現れることになったのです。彼らは当初「分離派」あるいは「独立派」と呼ばれました。これが「会衆主義」の始まりです。「分離派」は「国家からの自由」を強く説き、「信者がキリストの名において集まるところには常に普遍的教会が存在する」と主張しました。

祖国において「非国民」たらざるをえなかった彼らは、英国での弾圧を逃れてオランダに渡ります。その中からさらに信仰の自由を求めて新天地を目指した人々がいました。1620年「新しいイングランド」（ニューイングランド）を渴望して、メイフラワー号に乗って大西洋へ船出します。アメリカの東海岸に渡ったピルグリム・ファーザーズ（巡礼始祖）です。彼らは、現在の米国マサチューセッツ州プリマスに渡り、そこで会衆主義教会を設立し、会衆主義による教会と社会の共同体を建設するに至りました。会衆主義は宗教改革の基本精神である「信仰のみ」「聖書のみ」という原点、始まりに立ち直すことを徹底して行おうとしたのです。

「会衆」を意味する「コングリーゲーション」はラテン語で「共に集められる群れ」を意味しています。

会衆主義に立つ者は教会が国家の強制から自由であることと、キリスト者は神の前に平等であることをより徹底した形で求めました。

4. ニューイングランドでの新島襄

1865年7月にボストンに入境し、10月にハーディー家に「養子」として迎え入れられた新島は、さらにハーディー家の支援を受けて、フィリップス・アカデミー英語科に入学します。この時新島は英語力が不十分でしたから、寮には入らず学校の近くのヒドゥンという人の家に下宿することになりました。幸いにもヒドゥン家に同居していた、アンドーヴァー神学校の神学生であったE・フリント夫妻が家庭教師役を引き受けてくれます。新島も後にアーモスト大学を経て、このアンドーヴァー神学校で学ぶことになります。フリント夫妻からは聖書の手ほどきも受けました。最初にその手ほどきをしたのはフリント夫人です。下宿を始めて2カ月後に「フリント夫人は、毎夕、私に新約聖書を教えて下さいます」と新島は報告しています。それは聖書をつまみ食いのようにではなく、はじめて系統的に学ぶ時間であったと思います。

4-1. 「神は独り子を世に与え給うたほどに世を愛された」と出会う

フリント夫人から聖書を学び始めた頃のことです。新島はその人生にとっての基盤となる聖書の箇所に出くわすのです。それは「神は独り子を世に与え給うたほどに世を愛された」（ヨハネによる福音書3章16節）です。

これはフリント夫人が最初に新島に教えた言葉だとも伝えられています。この聖書の言葉は新島のところに落ちました。キリスト教に対してはじめて目が開かれます。聖書との本格的な出会いが始まりました。「神は独り子を世に与え給うたほどに世を愛された」この言葉は、聖書の言葉のひとつの断片です。小さな断片にすぎません。しかし断片の中にこそ普遍があります。ひとつの気づきを通して真理に出会うということが起こります。井戸を掘ることに譬えたら分かりやすいかもしれません。地中に向かって井戸を掘っていった時、地下水脈に行き当たるとそこから地下水をくみ上げ飲むことができます。ひとつの気づきが真理に達する井戸となり、そこから生きることの方向を定める基盤となるものを見出した、イエスの言葉を借りるならば「いのちの水」を飲んだと納得する体験が生まれます。

新島に聖書との本格的な出会いをもたらした聖書の言葉は、こののち終生、新島を支え続けることになります。

1874年7月2日に新島はアンドーヴァー神学校の課程を修了しますが、これに先立つ5月10日に、マサチューセッツ州レキシントンのハンコック教会で、初めての説教をする機会を与えられます。そのとき選んだ聖書の言葉がヨハネによる福音書3章16節でした。このときの説教は次のように始まっています。「私が選びましたこの聖句は新約聖書の中でも大層目立つ、特異なものでありまして、数多くの聖書の読者がこれに惹きつけられてきたように思います。この聖句は福音の真理の神秘を美しく解き明かすものでありまして、何故神が愛する御子をさえ惜まずにこの世にお与えになったのか、またいかなる条件の下でなら、この罪深い人類は永遠の命を得ることができるのかという問題を、はっきり説明するのであります。まことにこれこそは福音物語の神髄であり、地上で私たちの救い主が果たされた役割の意味を解くカギであります」（同志社編『新島襄 教育宗教論集』岩波書店 2010年 143頁）。新島にとってヨハネによる福音書3章16節の言葉は彼の信仰生活、そして脱国以降の人生のα（アルファ）でありΩ（オメガ）なのです。

4-2. 与えられるという体験

なぜこの聖書の言葉が新島のところに落ちたのか、説教の中で何も触れていないのですが、フリント夫人からこの言葉を解き明かされたとき、新島は日本を脱国してからボストンにきて、

ハーディー家の養子となり、家族の一員として迎えられ、ヒドウン家に下宿し、フィリップス・アカデミーで学ぶことができ、フリント夫妻からは家庭教師として教えてもらっている、そのすべてが与えられたものである、その体験が身にしみていたからこそ、「神はその独り子を世の与え給うたほどに世を愛された」という言葉が深く心に届いたのだと思います。自分が体験している一つひとつを与えてくださったのは神だという深い納得が新島を包んでいったのではないのでしょうか。納得というよりも衝撃であったというべきかも知れません。

ボストンの８年間で、新島はこの言葉のさらに深い意味に気づくのです。その気づきを促したひとつはフリント夫妻の感化です。フリントをよく知る人が彼の特徴を５つの単語に集約しています。聖書、祈り、安息日、与えること、節制、この５つです。この中で「与えること」については「神から受けたものに応じて、喜んで神にお返しすること」と補足されています。このことを新島はフリント夫妻から教えられたはずで、そこで「与えること」の大切さも深く学んだはずで、神から「与えられた」からこそ、喜んで「お返し」できる、ということが理解できたはずだと思います。「受けること」と「与えること」は表裏一体の関係なのです。新島は自分が「受けた」恵みが大きい分だけ、今度は人に「与える」ことを喜びとするようになります。ボストンで新島は「会衆派ワールド」の人たちから、何の見返りも求められることなく多くのことを与えられました。人一倍、愛された新島、大切にされた新島は、人一倍、他者を愛する人、他者を大切にする人になりえるのです。この深い体験は、同志社につながっていくのです。日本にキリスト教主義の学校を設立するという志の基となったのだと思います。

5. 「自由」の深層—なぜ「自由教育と自治教会」か—

新島がニューイングランド・ボストンでの８年間の留学生活の中で、学び体得したもうひとつの重要なことは「自由」です。

5—1. 束縛へのアンチテーゼとしての「自由」

日本を脱国したのは「自由」を求めてです。しかしこの時の新島にとって「自由」は曖昧なものだったのではなかったのかと思います。封建社会という「暗黒世界」、安中藩の狭い藩邸という「閉じ込められた閉鎖的世界」のアンチテーゼとしての自由、束縛からの解放という意味での自由ということです。

わたしたちが思う「自由」はどのようなものなのでしょうか。さまざまな制約や束縛から解放されて自分の意思で、思う通りに生きること、そのように表現できるもの、と言ってよいでしょうか。

5—2. 自由って何？

新島はニューイングランドに息づく「人格の尊厳、自由、平等、自主、独立、自治、愛」の精神に強く感化され、「自由」の価値、「自由感覚」を身につけました。帰国した新島は、「自由」について、維新後の日本人にとって自由というものは「輸入物」に過ぎないと認識しており、「自由ハ、古来英米ノ信徒カ、熱血ヲソソキ、買イ得タル」ものと述べています（『新島襄全集』2 同朋舎出版 1983年 509頁）。この言葉は、「神から与えられた自由」「神のみを主とすることに基づいた自由」ということを示していると思います。

5—3. 「真理は爾曹（なんじ）に自由を與える」

1890年1月27日、新島襄の葬儀の際に、遺体を若王子山頂に運び葬列に十数本の幟が付き添いました。その中にヨハネによる福音書8章32節の言葉が記された幟がありました。「真理は爾曹（なんじ）に自由を與える」。これは新島襄の生涯を象徴する聖書の言葉です。

5—3—1. 神から与えられる自由

聖書は「神」という束縛から自由が生まれと語ります。ガラテヤの信徒への手紙5章1節「この自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださったのです。だから、しっかりしなさい。奴隷の轡に二度とつながれてはなりません」。5章13節「兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい」。この二つの言葉を読み比べると分かりますが、ここでは一方で「自由の身にしてくださった」と言い、もう一方で「自由を愛によって仕えるために用いなさい」と言い、矛盾した勧めが同時になされています。「自由」と「仕える」、この二つは相容れない概念です。しかし聖書は、自由でありつつ、仕える者として生きよと勧めているのです。このことは「自由である」ことの意味を吟味し直すことを私たちに促します。譬えるなら、短歌や和歌が「五・七・五」「五・七・五・七・七」という限られた字数（＝束縛）の中でうたわれるからこそ、生の深さ、奥行きを表現する自由をもつというイメージです。

5—3—2. 自由の処方箋

イエスの譬え話の中に「自由である」とはどのようなことなのか、すなわち「自由の処方箋」を語っている物語があります。ルカによる福音書15章11—32節「放蕩息子」のたとえです。ある人に二人の息子がいました。弟は父に自分の財産の分け前を下さいと頼み、そのすべてを金に換えて、遠い国へ旅立ったというのが、この譬え話の始まりです。長男優先のユダヤ社会では、弟の受け取れる父親の財産は、兄の半分以上と定められていました。ですから、弟が自分の受け取れる分け前を早くもらって、町に出て、一旗あげようとした気持ちは理解できるところがあります。単なる勝手気儘な行為ではなかったはずだと思います。父と兄の許を離れ、与えられた全財産を懐に入れて遠い国に旅立ったとき、この弟の心には、今や自分は「自由」だ、「自由」を得て、新しい歩みを始めるのだ、という思いがあったはずで、彼にとっては「自由への旅立ち」であり、父の家を離れれば離れるほど、自由が増す思いがあったに違いないのです。しかし聖書は「自由」とは外側の自由に留まるのではなく、内側の自由も問われる、心のあり方がどうであるのかも問われるのだということです。弟は町で放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いして、食べることに窮し始めます。そこで我に返った弟は、父の許に帰ることを決心します。彼はもと来た道を引き返して、父の許に向かい、父はその弟息子を温かく迎えたというのです。外側の自由を求めて旅だった同じ道を、弟は内なる自由、心を生き生きと弾ませてくれる自由が実は父の許での暮らしの中にあったことに気づいて、父の許に帰っていったこと、そして父は大切なことに気づいて帰って来た弟息子を自分から駆け寄って迎えたのだと、この譬え話は語っています。この譬え話の中の弟息子のように束縛されないことが自由である、という考えに対して、真実の自由は、自らの意志によって、必要な時には、自分の望みや行動をあえて抑えることも含めて、なすべきことを決断する自由だと語ります。人は生きる限り、必ず何らかの制約や条件のもとに生きなければなりません。人間の自由とは、このような制約や条件から解放されることであり、必ずしもないのだと思います。そうではなく、こうした状況や条件に対して自分のあり方を判断し、選択する自由です。それが聖書の語る「自由の処方箋」です。「ヴィクター・フランクルは、その著『死と愛』の中で他の動植物と異なる人間の自由について次のようにいっている。『人間の自由とは、諸条件からの自由ではなくて、それら諸条件に対して、自分のあり方を決める自由である』（渡辺和子『目に見えないけれど大切なもの—あなたの心に安らぎと強さを』PHP研究所 2003年 133頁）自由とは「自分の勝手」ということではなく、他者とのつながりの中で、相手を生かし支えるために自分のあり方を選び取る自由のことです。新島が真理を学ぶ自由教育とともに、それを生かし用いる心を育てるために自治教会を併行させた理由です。「会衆派ワールド」で新島が出会った人々には、新島を選ばないという選択もありました。しかし彼らは新島に関わり、支援する道を選び取り、一緒に歩んでくれました。聖書が語る自由には、「神の招きに応える自由」＝「神を選ぶ自由」だけではなく「神を選ばない自由」の両方があるのです。「真理は爾曹（なんじ）に自由を與える」ここでいう真理とは神を意味します。神は人に「神を選ぶ自由」「神を選ばない自由」その両方を含んだ「自由」を与えているのだと思います。そのどちらを選ぶか、その主体は私たちなのです。何を選ぶか、それがその人の生きる方向を決めます。